

# 八田技師遇難記と 烏山頭水庫建壩軼事



財團法人紀念八田與一文化藝術基金會

中華民國 102 年 5 月





## 目 録

- Part1. 北辰－八田與一先輩顕彰で知ったこと  
北辰－我所知道的八田與一前輩……………5
- Part2. <sup>故</sup>宮地末彦先輩を悼む  
悼念宮地末彦先進……………14
- Part3. 石川穎一郎著：「ダムの話」からの抜粋  
嘉南大圳之父八田與一手記一則－烏山頭  
水庫建壩軼事……………22
- Part4. 八田與一・磯田謙雄・宮地末彦の略歴  
八田與一、磯田謙雄、宮地末彦略歴……………26



八田興一  
文化芸術事業

★

四高同窓会報  
(年3回刊)

〒920-0962  
金沢市広坂2-2-5  
(石川四高記念文化交流館内)

# 北 辰

No. 69 (22・11)

題 字 井 上 靖

発 行 四 高 同 窓 会 会

編 集 関 西 四 高 会 雄

中 川 和 雄

## 八田興一先輩顕彰で 知ったこと(1)

中川耕二

### 「遭難の記」

台湾「嘉南大圳事業」の完成に尽力し台湾の人々から敬慕されている八田興一(明40二工)は昭和十七年に陸軍省の要請で南方開発派遣要員としてフィリピンの綿作灌漑計画立案に向う途中、乗っていた大洋丸が長崎県五島列島沖でアメリカ潜水艦の魚雷を受けて沈没した事によって死亡した。三人の部下を伴っていて、湯本政夫と市川松太郎も共に死亡した。しかし宮地末彦(昭3理甲)は奇跡的に助かったのである。

その時の状況を宮地末彦は昭和五十三年三月に手記「遭難の記」を残している。この手記を八田興一顕彰運動の立ち上げに尽力した武内啓夫(昭17春理甲)から、八年程前に、小生へ送られてきていた。宮地末彦はこの手記をどこかへ発表しているかと推測されるが、分かっていない。ご存知の方が居られれば教えて頂きたい。

この貴重な手記の全文を紹介する。(原文のまま)

### 遭難の記 宮地末彦

あれから三十六年丁度今までの生涯の半ばに達し記憶もうすれて行くので、今の時点で遭難の憶出を記しておこうと思ふ。あれとは太平洋戦争が始まって半年目の昭和十七年五月八日の東支那海での大洋丸沈没の事である。

三月にヒリピン棉作灌漑の指導について軍から台湾総督府に依頼があり、私の中学校高等学校の大先輩で、有名な嘉南大圳烏山頭ダム築造責任者で当時総督府勅任技師の八田興一氏と耕地課勤務の湯本技師と私と市川技師の四名が選ばれて従軍する事になり四月に軍の指示を受けるために上京した。神戸港に上陸した日が大ーリットルによる東京初空襲の四月十八日であったが世間一般は緒戦の戦果に酔っていた時代とて逼迫した空気は少しも感じられなかつた。市ヶ谷の陸軍省整備局で諸般の手続をすませ別命があるまで予防接種などでのんびり十日余りを過した。五月五日午前十時宇品港集合を命じられ、四日の夜は宮島の最奥の鹿が庭で遊んでいる何とか云ふ旅館で四人水入らずの晩餐会を催し互の無事を祈りあつた。

翌日宇品で南方開発要員の技術者およそ千二百名と合流し、はしけに分乗沖泊の大洋丸(一万三千トン)に乗船したが下士官待遇の市川技師とは同室できず門司で一泊を合せてただで同室とは永遠の別となつてしまった。午後二時頃出帆六日門司着。それまで船尾に装着してあつた丸太の疑砲をはずして車輪付の野砲と取り替えたのを、八田さんと一処にこんなもので軍は何をする積りだろうかとあきれて見ていたのを思い出す。次々と集まってきた貨物船と船団を組んでいよいよ七日の午後出帆した。その日は何事もなく八日にはコレヒドール陥落のニュースが入り船内はなんとなく浮立っていた。午後五時頃それまで護衛していた特設砲艦が船団を離れて引き返していった。

六時半コレヒドール陥落を祝つての清酒一合赤飯付の祝膳につき食事が終つてのんびり一服して居ると突然至近距離落雷を思わすたゞきつぷす様な鋭い大音響と震動にすわと立上つた三人はひとつとびに船室にとつて返し救命胴衣を手にするや私を先頭に八田さんを中にして、駆け降りて来る群集をかきわけかきわけ階段を昇っている時二発目の魚雷が命中船尾の方に火の手があがり真赤に彩られていった。

上甲板にたどりついた時、ポートデッキの出入口から艦砲射撃であぶないと呼びながら崩雪をうって引き返して来る人の浪、巻き込まれまいと出入口の横に咄嗟に避難した。気がついて見るとそこには後の二人はもう見えなかつた。手早く救命胴衣をつけようやく静まった出入口からデッキに出ると指定のポートは満員の状態で船員がおろしかけて居た。駆け寄ると早く乗れと云われるままトップの方に腰をおろした途端後部のロープが切れてバラ／＼と全員が投げ落された。落下の途中帽子が飛びついて眼鏡がはづれて飛んだ。青黒い海がせまって来てそのまま海中へ、浮き上つて見廻すが四十人余りの人影はあたりには見当らず次のポートがうまく漕ぎ出して行くのが眼にはいった。これを追いかけてようと泳ぎ出したが着衣着靴のままでも案外楽に泳げた。二三分泳いだと思ふが兎に角ポートをつかまえる事が出来た。あたりはすっかり暮れて灯がついた大洋丸はまだ浮んで居た。ポートはつかまえたが待つて居れと云うだけで誰も引き揚げて呉れようとはしない。自力であるが外ないと思いつかんでいるカッター舷側の



史に著して下す

命綱をつたわって舷側にとめてある網の基部を両手で握ったが身体は船の下に流れ込んで到底あがれない。次に両足を命綱にかけてふんばるがそれでもあがれない。大きな波が来る度に身体がすつと浮き上るのを感じ波を待つことにして後を見ていると大きな波が寄せて来た。このときと渾身の力をこめて跳びあがりやうやく乳の線まで舷側にひっかかった。後は夢中ですり込みカッターの底までもぐり込んだ。そのとき大洋丸は船首を垂直に立てると一瞬暗い海中に消えて行った。泳いでいる中にちぎれて流れた胴衣の残りを尻に敷きレーンコートを脱いで頭からかぶって風を防いでいるとぬれたままながら少しずつ温まって来た。ボートに飛び込む浪のしぶきが夜光虫で淡青色に光って消る怪しい美さが今でも忘れられない。夜通し船員の艇長が叫ぶ「オールをつまはれ」の声にはげまされ若し転覆したらボートのどこかにかままって漂流することなど考へ続けらるうち永い永い一夜があけて来た。

九日午前十時頃昨日引き返して行った特設砲艦が途中から救助に掃つて来てボートを繋ぎ留め縄梯子をおろして呉れた。先を争つ

て梯子に取りつき踏みはずしてそのまま矢の様に速く流れ去る不運な人もあった。水兵の投げおろしてくれた先を輪にしたロープに片脚を入れて引き揚げてもらって艦上を歩き出した時さし出された一杯のウイスキーには生涯忘れられない感激の味がこもっていた。翌十日長崎に上陸した。後で聞いた事であるが助かったのは約三百名だそうで八田さん湯本さん市川君とは遂に再び会う事が出来なかつた。

人生五十年と云う、この時からあらためて五十年生きようとかたく心にきめたがあれから三十六年、あと十四年如何にして充実した余生を送ろうかと思ひめぐらして居る今日此の頃である。

(昭和五十三年三月記)

先輩、同輩、後輩の絆

八田與一(明40二工)顕彰に關わっている中で、先輩、同輩、後輩の絆のいくつかを知ることができた。

先輩として挙げられるのは鳥居信平(明37二理)である。静岡県袋井市出身で東京帝国大学農科大学に学び、渋谷駅前にある忠犬ハチ公の飼主上野英三郎教授の教えを受けた。農商務省や清国山西省

農学堂教授や徳島県技師を経て、請われて大正三年に台湾製糖(株)に転職し、八田與一とは三年遅れて台湾へ渡っている。大正十年六月、十三年五月の間に灌漑事業「二峰圳」を成し遂げ、今も台湾の人々から敬慕されている。八田與一の「嘉南大圳事業」が着工されたのが大正九年だから、年代的に見ても二人の経歴から見ても官と民の違いこそあれ、二人は技術屋同士として交流していたのではなからうか。公式な交流記録を確かめてはいないが、当然だと推測される。微笑ましいことである。

同輩として挙げられるのは森岡二期(明40一法)である。奈良県出身で東京帝国大学法科大学卒業後内務省に入り、島根、青森、茨城、栃木県の知事、警保局長を経て、昭和十一年九月、昭和十五年十一月の間に台湾総督府総務長官を務めている。八田與一は昭和十四年六月に勅任官に昇任している。その頃は台湾総督府の事務方のトップと技術方のトップを四高同期が担っていたことになる。誇り高いことである。お互いに心強かったことだろうと推察される。なお、森岡二期は昭和十六年には日本野球連盟の初代会長に就任し、後に野球殿堂入りしている。同窓の正力松太郎(明40一法)と

は野球を通して親交があったと推察される。

後輩として挙げられるのは磯田謙雄(大3二工)と宮地末彦(昭3理甲)である。

磯田謙雄は大正七年に東京帝国大学工科大学を卒業して直ぐに台湾総督府に就職しており、八田與一と全く同じコースを歩んでいる。八田與一が亡くなって約三ヵ月後に行なわれた「故八田與一を偲ぶ座談会」の冒頭で挨拶をしておられることからして、八田與一とは非常に近い関係にあったのだと考えられる。八田與一の長男晃夫氏は生前「磯田謙雄さんには随分お世話になった」と話しておられた。磯田謙雄の台湾での最後の職は総督府農商局耕地課長である。

宮地末彦は昭和六年に東京帝国大学農学部を卒業して直ぐに台湾総督府に就職した。昭和五年に完成した直後の嘉南大圳事業の維持管理に携わって八田與一の指示・指導を受け、また、将来は曾文溪本流でのダムが必要であると考え、図画・調査を行なっていたとのことである。宮地末彦を信頼していたからこそ八田與一は、昭和十七年に綿作灌漑計画立案のためにフィリピンに赴任するにあたって三人



の部下の一人として同行させたのであろう。

嘉南大圳事業着工の頃に磯田謙雄が、完成直後に宮地末彦が八田先輩を支えていたことが伺え、先輩と後輩の絆を感じるものである。これまた微笑ましいことである。なお、磯田謙雄・宮地末彦は共に金沢一中・四高・東京帝国大学を通して八田與一の後輩である。

### 感謝状

四高開学百年祭を期し、同窓会の有志が八田技師夫妻墓前祭参列訪問団を結成し、昭和六十一年五月八日に墓前祭に初めて参列している。その際、左記の神保龍二同窓会長名の感謝状を嘉南農田水利会へ提供しているので、紹介しておきます。

(24修理甲)

中川会員は理学部で地質専攻、退職後、研究のかたわら17春理・武内啓夫先輩の八田與一先輩顕彰事業に参加、毎年、台湾を訪問し、内外に烏山頭ダムの意義を普及してきた。近年、台湾の学会でも研究成果の発表を求められている。

(編)

## 感謝状

### 台湾省嘉南農田水利會殿

貴水利會におかれては、故八田與一先人の墓前祭を  
甲午余を通じ毎年開催しての盛を感あつたこと  
八田先人は日本國石川縣金澤市出身で東京帝國大學  
入學前日金澤市在った第四高等學校で學ばれた  
我々の大先輩であり夫人も金澤市の出身であります  
烏山頭水庫が公並に灌漑水路建設に盡力した  
先輩の業績が貴會の御事情より後世に傳へて  
傳へられていくことは、第四高等學校同窓生一同  
として感銘の至りであり、深く感謝申し上げます  
あります。母校開學百年を迎え、當り同窓會同  
を代表し、厚く御禮申し上げます。

一九八六年五月八日 吉科

第四高等學校同窓會

會長

神作 毅





## 我所知道的八田與一前輩

中川耕二<sup>1</sup>

譯者：呂榮進先生<sup>2</sup>

### 「遇難之記」

致力台灣「嘉南大圳事業」的完成，為台灣人民所景仰的八田與一在昭和 17 年（1942 年）奉陸軍省<sup>【譯註 2】</sup>要求下，以南方開發派遣要員的身分被派往菲律賓從事棉作灌溉施設規劃途中，所搭乘的大洋號在長崎縣五島列島海上被美軍潛水艇的魚雷擊沉之後遭遇海難死亡。同行的屬下三人，除宮地末彥奇蹟似的獲救外，其餘湯本政夫和市川松太郎一同遇難殉職。

據當時的狀況，在昭和 53 年（1978 年）3 月由宮地末彥所遺留的「遇難之記」是記載彰顯八田與一的記事。

而這貴重的記錄，我將全文介紹。

遇難之記

宮地末彥<sup>3</sup>

遭遇這個劫難已 36 載，我也已年過半白，如今必須要回憶記錄當時遇難的情形，那是太平洋戰爭開始後的前半年，在昭和 17 年（1942 年）5 月 8 日在東支那海大洋號沉沒的慘事。

在 3 月依據軍方請求下，奉台灣總督府派往菲律賓從事有關棉作灌溉施設の指導。和中學時代的大前輩，也就是嘉南大圳烏山頭水庫的建造負責人，總督府勅任<sup>【譯註 3】</sup>技師八田與一先生，與在總督府耕地課任職的湯本技師及市川技手<sup>【譯註 4】</sup>共 4 名，被選為隨軍人員，接受軍方的指示抵達東京。在市個谷的陸軍省整備局，為了完成各種手續以及預防接種

1 日籍工程輩耆宿，日本地質專家、技師。中川先生在理學院專攻地質學。退休之後，一面研究，一面參加武內啟夫先生所舉辦彰顯八田與一學長的事業。每年，都會來台訪問，並且對內對外都大力推廣烏山頭水庫的意義，近年來在台灣的學會也請求研究成果的發表。

2 前台灣省政府水利局第八工程處處長。

3 八田技師派往菲律賓時，同行四人中，宮地先生為唯一倖存者。



而渡過了十幾天輕鬆自在的日子。而在 5 月 5 日上午十時受命於廣島宇品港集合，5 月 4 日夜晚，我們在宮島最裡頭的旅館住宿，看到鹿群在庭院中遊玩，同時自辦晚宴，來互相祈求平安無事。

隔日在廣島宇品港，和其他南方開發派遣要員技術者 1,200 名集合，分別搭乘（一萬三千噸）的大洋號出發前往。我和下士官待遇的市川技手【譯註 4】並沒有同寢室，只在門司看到之後，卻從此天人永隔。下午二時左右出發，5 月 6 日抵達下關門司港。看到正卸下裝載在船尾的大型重砲而改裝附有車輪的野砲，這讓我想起八田先生和我都感到非常的驚訝，為什麼軍方要裝載這些東西。翌日的午後起航，8 日有消息傳來菲律賓的科里幾多要塞已經淪陷的消息【譯註 5】，5 月 8 日的黃昏，護航的軍艦開始折回。

六時三十分為慶祝日軍攻陷菲律賓的科里幾多要塞，慶祝的餐飲附上紅豆飯和清酒一壺，用餐之後換上輕便服時，突然感覺船尾激起近距離像落雷的巨響和猛烈的震動，我們三人緊急返回船艙，手拿救生衣，在慌忙之際，第二枚魚雷已命中船尾，而一團火球正在燃燒著。

由於魚雷的爆炸而引起火災，有的船客認為遭遇艦砲射擊而潛入船艙，有的逃上甲板上搶搭救生艇。驚覺一看，在我身後的兩位同伴已經不知去向了，而我儘速穿上救生衣，從出入口登上甲板，發現指定的救生艇已經是滿座的狀態。船員在卸下救生艇之前，一直高喊著趕快過來搭乘後，不料吊船的繩索折斷，致救生艇急速垂直掉落，而人在掉入的途中，我的帽子和眼鏡也都飛走了。環視眼前浮上的黑藍色的大海，竟然找不到、看不清身旁有 40 多人的身影。而接下來的另隻救生艇，卻在我眼前很順利的划出，為了追上這艘救





生艇，穿上衣服和鞋子的我游起來反而格外的輕鬆。而大約游泳二、三十分鐘左右才抓上船角。雖然落日之後周圍已經呈現黑暗，但是船燈顯示大洋號還半斜浮在海面。一直等待，緊抓著救生艇，可是誰也沒有把我打撈上來，只能靠著自己力量想要從船的兩側爬上去，但是兩手緊握船繩卻爬不上來，接著想要兩腳用力跨過船邊，也使不上力。大浪來襲的時候，想身體會浮上來，故等待大浪再次來襲，靠著大浪的推力，渾身使勁的想要跳上救生艇，卻還是掛在船的側邊。之後，像夢中一樣，潛入救生艇的底部。而在那時發現大洋號的船首也垂直的往海底下沉消失。在游泳時拾起漂流在海上的救生衣當成坐墊，脫下雨衣蓋住頭部用來擋風，濕冷的身體似乎已慢慢感覺有一點回溫。救生艇乘風破浪，螢火蟲閃閃發著淡青色的光，這般怪異的美景，至今仍無法忘懷，一整夜船上的艇長總是以勉勵的口吻要我們全員都要挺住，要是救生艇翻覆了，就只能隨波逐流。想著想著，這真是一個漫長的夜晚。

9 日上午十時左右，已回航的護航艦隊，也緊急折回來擔任護航，而將附有繩梯的救生艇一一卸下，爭先接下梯子，飛踏上去，而踏上艦艇時，船上的士兵遞上一杯威士忌的酒，是我終生難以忘懷感激的味道。隔天 10 日在長崎登陸之後聽聞被救起的人員大約 300 名，而八田先生、湯本先生、市川君已經不能再相會了。

有人說人生五十年，若是從那個時候想要再活 50 年，而今已經過了 36 年，那麼剩下的 14 年我該如何充實餘生。時至今日我依然思考這個問題。

（昭和 53 年 3 月記）



## 「學長、同學、學弟之間的關係」

在彰顯八田與一的事蹟當中，學長、同學、學弟之間的關係，有幾件相關的事情是能夠瞭解的。

以鳥居信平為例，他出生在靜岡縣袋井市，就讀於東京帝國大學農科大學（水利），曾受教於在涉谷車站前忠狗 Ha-Thi 公銅像的飼養者上野英三郎教授。歷任農業商務省【譯註 6】、清國山西省農學堂教授、和德島縣技師。在大正三年（1914 年）轉職於台灣製糖株式會社，八田與一先生是比他晚了三年才來台灣。在大正 10 年（1921 年）6 月至 13 年（1924 年）5 月之間完成了「二峰圳」的灌溉事業，現今也被台灣的人民所敬仰。由於八田與一的「嘉南大圳事業」開工於大正 9 年（1920 年），從年代來看，兩人的經歷是「官」和「民」的身分不同。雖說兩人同為技術專家，是否彼此之間有往來交流，在正式的交流紀錄當中並未見到記載，當然這是推測，所以只能微笑以對。

再舉同學森岡二郎來說，他出生在奈良縣，畢業於東京帝國大學法科大學，之後進入內務省，曾擔任過島根、青森、茨城、栃木縣的知事【譯註 7】，也曾擔任過警保局長，在昭和 11 年（1936 年）9 月至昭和 15 年（1940 年）11 月之間擔任台灣總督府總務長官。八田與一是在昭和 14 年（1939 年）6 月昇任為勅任官【譯註 3】，那時候台灣總督府的負責行政事務方面的高級長官和技術方面的高級長官，都是金澤市第四高等學校的同期校友所擔任的，這是值得驕傲的。可以推論彼此之間都具有強烈的企圖心。

而森岡二郎在昭和 16 年（1941 年）也曾擔任日本棒球聯盟的第一任會長，之後也加入棒球聯盟，和同學正力松太



郎透過棒球的關係，雙方也建立了很深的交情。

接下來再舉例，學弟磯田謙雄和宮地末彥。

磯田謙雄在大正 7 年（1918 年）畢業於東京帝國大學的工科大學（土木），之後馬上就職於台灣總督府，和八田與一先生的資歷一路走來幾乎是完全一樣的。在八田與一過逝 3 個月之後，所舉辦「思慕故八田與一的座談會」的開場就是由他來作為引言，可以了解和八田與一的關係是非常親近的。八田與一的長男晃夫在生前也曾經說過“磯田謙雄先生”也對他們照顧有加，磯田謙雄在台灣的最後職務是總督府農商局耕地課長【譯註 8】。

另外，宮地末彥是在昭和 6 年（1931 年）畢業於東京帝國大學農學部（農業土木）。之後，馬上在台灣總督府任職。昭和 5 年（1930 年）在嘉南大圳工程完成之後，對於從事嘉南大圳事業的維護營運管理曾接受八田與一的指導。另一方面，考慮將來曾文溪主流需要建造水庫，所以在八田與一的指示下，進行規劃調查【譯註 9】。就是因為八田與一非常信任宮地末彥，所以在昭和 17 年（1942 年）參與菲律賓棉作灌溉規劃的實地調查。而隨行三人之中，他是其中一位。

在嘉南大圳事業工程開工之時，八田前輩受到磯田謙雄的支持，而完成之後也受到宮地末彥的協助，深深的感覺學長和學弟之間的情誼，感覺是一件有趣的事。

而且磯田謙雄、宮地末彥同樣是畢業於金澤一中、第四高等學校，東京帝國大學也都是八田與一的學弟。



## 「感謝狀」

為慶祝第四高等學校創校百年的慶典，故集合同窗會的校友，有志一同參加八田技師夫妻墓前參拜訪問團，在昭和61年（1986年）5月8日第一次參加墓前祭拜。而在當時，如以下的介紹所記，這張感謝狀是以同窗會會長神保龍二為代表，敬致嘉南農田水利會。

### 感 謝 狀

敬致台灣省嘉南農田水利會

貴水利會四十多年以來，對於每年所舉辦故八田與一先人的墓前祭拜和悼慰先靈，致予謝意。

八田先人出生在日本國石川縣金澤市，東京帝國大學入學之前是就讀位於金澤市之第四高等學校，是我們的前期學長，夫人也是出生在金澤市。學長的豐功偉業是致力於烏山頭水庫以及灌溉水路的建設，由於貴會的盛情厚意，才使得這個事蹟能夠代代相傳於後世，對於第四高等學校同窗會所有校友而言實在深感銘心，同時致上最深深的感謝之意。正逢迎接母校創校百年之際，同窗會代表所有校友致予最深厚的謝意。

1986年5月8日吉祥

第四高等學校同窗會

會長 神保龍二（印）

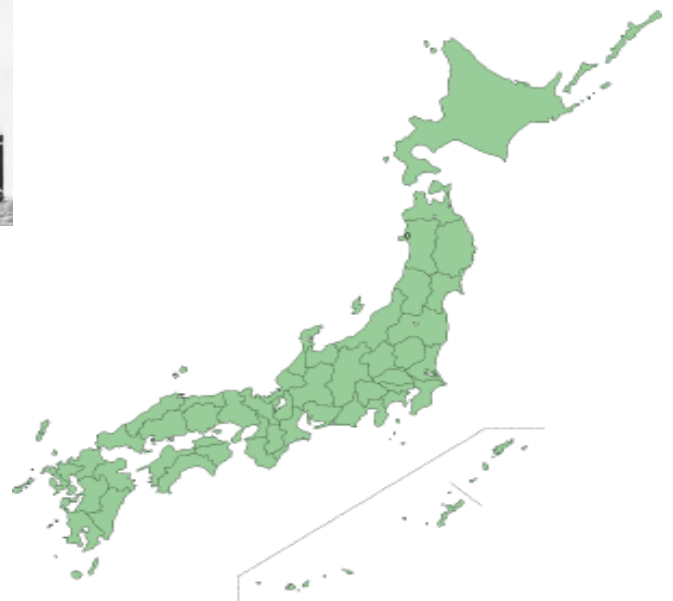
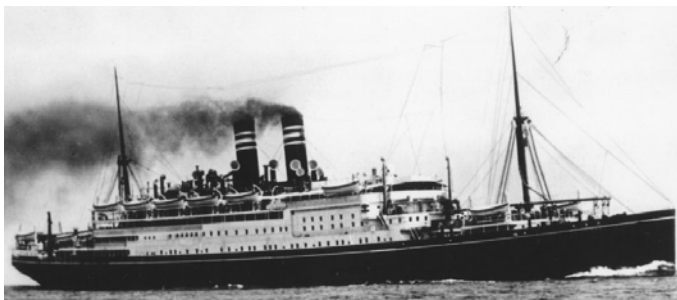


### 「譯者註」

- 【譯註 1】本文出處：日本第四高等學校（俗稱「四高」）同窗會報第 69 期，北辰，2010 年 11 月 30 日。
- 【譯註 2】陸軍省為內閣之一，首長稱「陸軍大臣（陸相）」由現役之大將或中將就任。
- 【譯註 3】相當於台灣簡任官。
- 【譯註 4】相當於台灣技士或工程（工務）員。
- 【譯註 5】科里幾多要塞淪陷後，美軍全部撤出菲律賓，日本完全佔據菲律賓實施軍政。
- 【譯註 6】指內閣農業商務省。
- 【譯註 7】相當於台灣之縣長。
- 【譯註 8】耕地課是光復後前台灣省水利局的前身。
- 【譯註 9】指多目標效益的台灣最大曾文水庫。當時因戰爭的關係未能興建，其留下之調查規劃資料，由省水利局據以細部設計，由省政府設置「曾文水庫建設委員會」及「工程局」，於 1967 年興建，1973 年完工。（依據「經濟部水利署文化性資產口述歷史成果報告」）

日本郵船株式会社之大洋丸（1911-1942），係分派為南方開發人員及資材運輸之陸軍用船，八田與一先生於 1942 年 4 月獲日本陸軍省聘為南方開發派遣要員，而於 1942 年 5 月 5 日搭乘大洋丸，該輪合計搭載開發要員 1,097 名，乘務員 263 名（計 1,360 名）及裝載材料之後，從廣島之宇品港經菲律賓往新加坡之方向出航，但於 5 月 8 日在長崎縣男女群島附近，遭美國軍艦「USS Grenadier (SS-210)」魚雷擊中，引燃所裝載之碳化物將全船化為火海數十分後沉沒。包含八田與一先生等乘客 660 名及船長與乘務員 157 名合計 817 名因而不幸殉難。

日本郵船株式会社に属する大洋丸（1911-1942）は南方開発要員並びに資材輸送のため陸軍配当船となり、1942 年 4 月日本陸軍省が八田與一氏を南方開発派遣要員と命じ、1942 年 5 月 5 日大洋丸に搭乘した、大洋丸は開発要員 1,097 名、乗組員 263 名（計 1,360 名）及び資材搭載の上、フィリピン經由シンガポールに向け広島之宇品を出帆、5 月 8 日長崎県男女群島付近、米艦「グレナディア（SS-210）」の雷撃を受け、積荷のカーバイドに引火して全船火の海と化し数十分にして沈没した。八田與一氏を含む乗客 660 名並びに船長以下乗組員 157 名（計 817 名）はついに殉難した。





## 名誉会員 故宮地末彦先輩を悼む

本学会名誉会員宮地末彦先輩には、去る平成3年1月20日午前10時56分、東京都杉並区阿佐ヶ谷、河北病院にて奥様と長男の御家族に見守られながら静かに御他界されました。享年84才、あと10日余りで満85才になられるところでした。病名は慢性骨髄性白血病で、最後は急性肺炎の併発による心不全でありました。

私は宮地さんがなくなられる丁度一週間前の1月13日に河北病院にお見舞いに伺ったのですが、その時には私の手を握られ「よく来てくれた」と話され、こんなに早く昇天されるとは考えられませんでした。農業土木学界はまた大切な先輩を失ったわけで誠に痛恨の極みであり、心から御冥福をお祈りいたします。

宮地さんは明治39年2月2日金沢市で宮地家の六男として生れ、石川県立第1中学校、旧制第4高等学校を経て、東京帝国大学農学部農学科（農業土木専修）に進まれ、昭和6年3月に卒業されました。

大学卒業後直ちに台湾総督府に就職、内務局土木課水利係に勤務され、台湾総督府には太平洋戦争終了まで在籍されました。この間台湾では、水締め工法で有名な八田ダムの設計者八田技師の下で、嘉南大洲烏山頭（八田ダム）地区において15万haに及ぶ田畑輪作計画の樹立と実施に従事されたのであります。曾文溪ダムの計画もその一つであります。

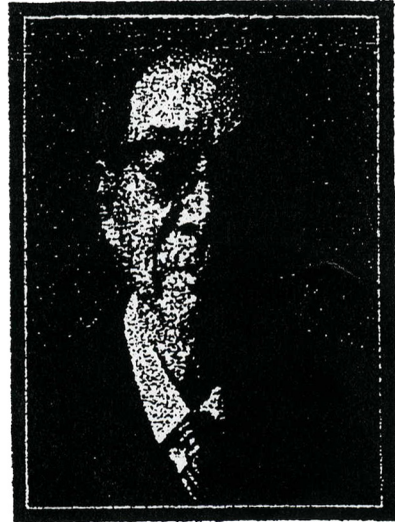
昭和17年、日本政府から台湾総督府に南方開発の技術者派遣の依頼があり、宮地さんも選ばれて八田技師他4名と共に「綿作かんがいの指導」のため内地を出港したのであります。乗船した「太洋丸」は五島沖で米海軍潜水艦の雷撃により撃沈され、乗員1,200名中900名死亡、300名生存（八田技師は不帰）、宮地さんは九死に一生を得て佐世保に生還されたのであります。

その後昭和18年2月に、フィリピン、マニラに出向、米作指導に従事され、昭和19年3月台湾に帰還されたのであります。

終戦後21年12月に、台湾から故郷金沢に夫人と3人の男子を連れて引揚げ、一年余り浪人のあと昭和23年1月に農林省関東開拓研究所（埼玉県深谷）所長に就任、昭和25年岡山農地事務局芦田川農業水利事業所初代所長に就任、三河ダム等の建設に尽力されました。昭和26年6月、北海道開発局発足と同時に初代網走開発建設部長に就任。寒地の農業基盤整備のみならず道路、橋梁、港湾等の建設に貢献されました。

昭和29年7月、熊本農地事務局嘉瀬川農業水利事業所（佐賀県）所長就任、北山ダム等の建設に努力、昭和32年岡山農地事務局計画部長、昭和35年退官、小松建設工業株式会社に入社、取締役就任。昭和56年同社退社。

以上が宮地さんの略歴であります。東大農学部卒業以後太平洋戦争終了以前は台湾、フィリピンにおいて熱帯農業水利に従事され、終戦後は日本の北端から九州にかけて、全国を股にかけ常に第一線で活躍され農業土木事業に多大の貢献をされたのであります。





北海道在任中を除いては常にダムに関する事業に従事されたので、とくに御遺詣が深かった訳であります。

私が宮地さんと知り合いになれたのは、北海道においてであります。昭和27年、私が北海道開発局開拓課で旭川市の近くの当麻ダムの建設現場にいた時であります。当時、網走開発建設部長の宮地さん、帯広開発建設部長の友宗さん、本局直属課長の木下眞治さんの三人が度々当麻に集まり、いろいろと当麻ダムの建設について御教示を承ったのが最初であります（三人共今は故人となりました）。昭和33年、私は北海道開発局から岡山農地事務局計画部技術課長に転任したのでありますが、その時の直属上司計画部長がまた宮地さんでありました。宮地さんには、退官され小松建設工業(株)に行かれるまで2年間お世話になったのであります。中海干拓、笠岡湾干拓、吉野川総合開発計画、吉井川農業水利計画等々の大計画の調査に当り、宮地部長の偉大な見識と御指導を心から感謝致した次第です。

宮地さんはまた多くの方の面倒見がよく、この岡山農地事務局時代に農業土木学会中国四国支部の支部長に昭和32年7月～昭和36年5月の間就任し、創設間もなかった支部の振興に大きく寄与されたのであります。この功績により、昭和53年5月30日の総会で名誉会員に推挙されたものであります。

宮地さんは直情な性格の持主で、曲がったことの嫌いなお人柄であり、また仲々の酒豪でありました。その端正な風貌から一見冷たい性格の方と思われがちでしたが、内面は優しい温情の持主であり、とくに家庭にあっては善良なパパであったと推察致しております。仕事に対しては誠に厳格で、とくにダム計画には情熱を傾けられ、私たち後進を指導して頂いたことに対して感謝の念を禁じ得ません。

宮地さんは太平洋戦争のために大変ご苦労され、文字通り東奔西走の人生を送られ、わずかに晩年は落ちついた生活を送られたように思われます。

私たちの偉大な先達、従四位勲四等瑞宝章宮地末彦さんの葬儀は平成3年1月23日、小金井市の西念寺において、御親族知人数参列のもと、金沢市の宮地家菩提寺日蓮宗「本長寺」住職の読経のもと、しめやかに行われました。

大学時代の同級生小川文良さんの弔電「宮地君、もう一度話がしたかった。無念。御冥福を祈る」が披露された時は感無量のものがありました。願わくは安らかに昇天され、天国にて木下さんや友宗さんと湾岸戦争たけなわの下界を見下しながら御痛飲して下さい。

((株)勝村建設顧問 堂 源 一 記)



## 悼念榮譽會員<sup>故</sup> 宮地末彥先進<sup>【譯註 1】</sup>

著者：堂 源一<sup>1</sup> 譯者：呂榮進先生<sup>2</sup>

本學會榮譽會員宮地末彥前輩，在平成 3 年（1991 年）1 月 20 日上午 10 時 56 分，病逝於東京都杉並區阿佐個谷的河北醫院，在夫人和長子的家人隨侍在側時安詳的離去，享年 84 歲，再過 10 多天就滿 85 歲。病名是慢性骨髓性白血病，最後由於急性肺炎的併發而導致心臟衰竭。

我正好在宮地先生去逝的前一個禮拜（1 月 13 日）到河北醫院探望他，那時候他還握著我的手說：「很高興來看我」，沒想到竟然這麼早就仙逝了。農業土木學界又痛失這麼重要的先進，真讓我深感哀痛，然而也由衷地為他祈禱冥福。

宮地先生在明治 39 年（1906 年）2 月 2 日出生於金澤市，在家中排行第六位男孩，一路由石川縣立第一中學校、舊制第四高等學校，一直升學到東京帝國大學農學部農學科（專攻農業土木）<sup>【譯註 2】</sup>，而畢業於昭和 6（1931 年）年 3 月。

在大學畢業後就馬上任職於台灣總督府的內務局土木課水利係<sup>【譯註 3】</sup>。一直勤務至太平洋戰爭結束。而在台灣的期間，奉派在以「半水力沖淤式工法興建土石壩」<sup>【譯註 4】</sup>而聞名之八田壩的設計者八田技師的門下，對嘉南大圳烏山頭水庫全灌區 15 萬甲旱·水田輪作灌溉的規劃和實施，多參與其事。而曾文溪水庫<sup>【譯註 5】</sup>的調查規劃也是其中之一。

1 勝村建設股份公司顧問。

2 前台灣省政府水利局第八工程處處長、台灣省水利局鯉魚潭水庫工程處處長退休。





昭和 17 年（1942 年），由日本政府請求台灣總督府派遣南方開發的技術者。宮地先生也被選為包括八田技師共 4 名成員，為了「棉作灌溉的指導」一同由日本廣島宇品港出發。然而所搭乘的船隻「大洋號」在五島海域卻被美國海軍潛水艦的魚雷擊沉，1,200 名乘員當中，900 名死亡，（八田技師也是其中之一）。只有 300 名生存。宮地先生卻在九死一生的狀況之下在長崎佐世保被救回來。

之後在昭和 18 年（1943 年）2 月，公差前往菲律賓的馬尼拉，從事稻作灌溉生產指導，一直到昭和 19 年（1944 年）3 月回到台灣。

在戰爭結束後，也就是昭和 21 年（1946 年）12 月，帶著夫人和三位公子離開台灣回到故鄉金澤市，而待職年餘之後，於昭和 23 年（1948 年）1 月擔任農林省關東開拓研究所（埼玉縣深谷）的所長，昭和 25 年（1950 年）擔任岡山農地事務局芦田川農業水利事業所第一任所長，對三河水庫的建設致力頗多。在昭和 26 年（1951 年）6 月，北海道開發局成立同時也榮升網走開發建設部的第一任部長。不只是寒冷地區的農業基礎建設，包括道路、橋樑、港灣等等的建設也很有貢獻。

昭和 29 年（1954 年）7 月，就任於熊本農地事務局嘉瀨川農業水利事業所（佐賀縣）的所長時也致力於北山水庫等建設。昭和 32 年（1957 年）又轉任岡山農地事務局計畫部長，直到昭和 35 年（1960 年）退休。之後進入小松建設工業股份公司擔任執行董事，在昭和 56 年（1981 年）退休於該公司。



以上是宮地先生的簡歷，東京大學農學部畢業之後，太平洋戰爭結束之前，都是在台灣、菲律賓從事熱帶農業水利的工作，戰爭結束之後，由日本的北端到九州走遍全國，經常活躍於第一線。對於農業土木事業，所作的貢獻良多。

除了在北海道任職之外，由於長時間從事於各地水庫的建設事業，所以其造詣之深更不在話下。

我和宮地先生是在北海道認識，那是在昭和 27 年（1952 年），於北海道開發局開拓課旭川市附近的當麻水庫的工地現場。當時，網走開發建設部長的宮地先生、帶廣開發建設部長的友宗先生，以及本局直屬課長的木下真治先生三人經常在當麻聚集。關於當麻水庫的各項建設，這是初次受教於宮地先生（而今三人都已成為故人）。昭和 33 年（1958 年），我從北海道開發局轉任岡山農地事務局計劃部技術科長，而當時的直屬上司計畫部長就是宮地先生。宮地先生一直到退休之後進入小松建設工業公司的這 2 年也都深受他的照顧。中海海埔新生地開發、笠岡灣的海埔新生地開發、吉野川總合開發計劃，吉井川農業水利計劃等等，在負責這些大型工程計劃的調查規劃時，宮地先生對我的指導，和他偉大的見識，讓我由衷致以感謝。

受惠於宮地先生的人很多，在岡山農地事務局的期間，於昭和 32 年（1957 年）7 月至昭和 36 年（1961 年）5 月之間，他擔任農業土木學會中國四國支部的支部長。對於該支部的發展也有很大的貢獻，因為這個功績，所以在昭和 53 年（1978 年）5 月 30 日被總會推舉為榮譽會員。

宮地先生個性直爽，不喜歡拐彎抹角，在許多朋友當中



酒量很好，由他端正的相貌看來，雖略表現出冷淡的性格，然而內心是相當的溫柔熱情，特別是在家庭裡頭，可以觀察出他是非常善良的父親。對於工作要求嚴格，特別在水庫計劃上，格外用心，對於後輩熱心給予的指導，不禁感念萬分。

我認為宮地先生爲了太平洋戰爭嚐盡辛苦，就如上述，他的人生是在東奔西走的日子度過的。只有晚年，些許的時間才可以過著穩定的生活。

我們偉大的曾蒙政府授與從四位勳四等瑞寶勳章之宮地末彥先進，於平成3年（1991年）1月23日在小金井市的西念市葬禮出殯的那天，許多親族友人也多數來參加。在金澤市宮地家菩提寺日連宗「本是寺」的主持誦經之下安然的離去。

大學時代的同學小川文良先生，來電悼念「宮地君，我還想再和您說話。遺憾。祈求冥福。」當這篇文章被披露出來的時候，我內心感觸良多，願您安詳的昇天。在天國和木下先生及友宗先生見面時，請一邊暢飲，一邊往下看看我們的世界正值波斯灣戰爭。

（勝村建設股份公司顧問 堂源一記<sup>【譯註6】</sup>）



### 「譯者註」

- 【譯註 1】宮地末彥先輩是一生奉獻於台灣・日本之水利工程師（技師）。本悼文係由日本農業土木學會第 59 卷第 3 號（1991 年 3 月）刊載。
- 【譯註 2】日本戰前設立農業土木科者，大學部分為國立東京帝大、九州帝大及台北帝大；高校部分為國立三重高農、宇都宮高農及岐阜高農而實業學校部分為台南州立台南農業學校（五年制）。
- 【譯註 3】水利係相當於台灣之水利股。
- 【譯註 4】Semi-Hydraulic Fill Method。
- 【譯註 5】指多目標效益、台灣最大的「曾文水庫」，當時因戰爭關係未能興建，其留下調查規劃資料（包括壩址、壩型等）由台灣省水利局據以完成細部設計；嗣後省政府成立曾文水庫建設委員會及曾文水庫工程局於 1967 年興建、1973 年完工，現由經濟部水利署南區水資源局管理營運中。
- 【譯註 6】請另參閱台灣農田水利雜誌 38 卷 4 期溫理仁教授著「憶前輩宮地末彥先生」。



## 石川穎一郎著：「ダムの話」からの抜粋

昭和 24 年（1949 年）3 月 30 日朝日新聞社から発行された石川穎一郎著：「ダムの話」の目次に、ダムについての思い出の中に八田堰堤の項目があり、この内容は八田堰堤を考えるで非常に貴重と考えられたので、転載して参考に供する。

### ※著者略歴

明治 18 年浦賀に生れる 東京帝國大學工科土木工學を卒業  
工學博士 初め水道工事に従事し のち宇治川水力電氣會社および  
日本電力會社において水力工事に従事 大正 13 年と昭和 11 年の 2  
度にわたり歐米の堰堤工事を視察。

※原文での度量衡の数値にメートル法数値を併記した。

平成 24 年（2012）10 月

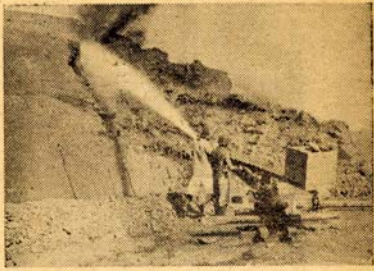
八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会 世話人

環境地質コンサルタント 中川耕二

業にあたり、何等失策を起さないで無事発電の目的を遂げたから良いもの、かような事件のため無理な仕事をし取り返しのつかない失敗をしたらばどうであつたらう。著者がこの本によつてダムを知識を普及したいのは、こういうためなのもある。

九 八 田 堰 堤

この頃八田興一君の小稿を探し出したから、八田堰堤の造られた當時のいきさつをここに発表しよう。八田君は私の親友で、學校を出てからその一生を臺灣總督府土木課に送つた。天才的な奇行に富んだ人で、臺灣の名物男であつた。同君は有名な嘉南大しう水給土堰堤を計畫し完成した。これが八田堰堤である。私が初め關係し、後工事成らざるを覺つて、手を引いた臺灣の大甲溪達見堰堤も八田君の發見にかかり、同君に寸寸められて關係したのが、その始まりであつた。八田君は昭和十七年の初夏臺灣から上京し、これから南洋視察に行く、歸つてからゆつくり話をしようとうとう東京から手紙をよこし、南へ出立した。然るにその途中、玄界灘で多數の有望な技術者と共に遭難してしまつた。まことに氣の毒な最期であつた。今はあのダムを造つた當時の關係者は全部故人となつたから、八田君の殘した記事を発表しても迷惑をかけることもなからう。



第 18 圖 八田堰堤 射水で丘陵を崩す

八田堰堤は臺灣臺南州にあり、半射水式土堰堤で高さ一八五尺、延長四三〇〇尺、貯水量五五億立方尺、貯水面積約一〇〇〇町歩、大正五年から昭和五年まで滿十ヶ年以上かかつて完成した大工事で、このダムの築造によつて一五萬町歩の灌漑に成功し、臺灣に非常に大きな福利をもたらしたものである。以下八田君の遺稿から抜萃する。

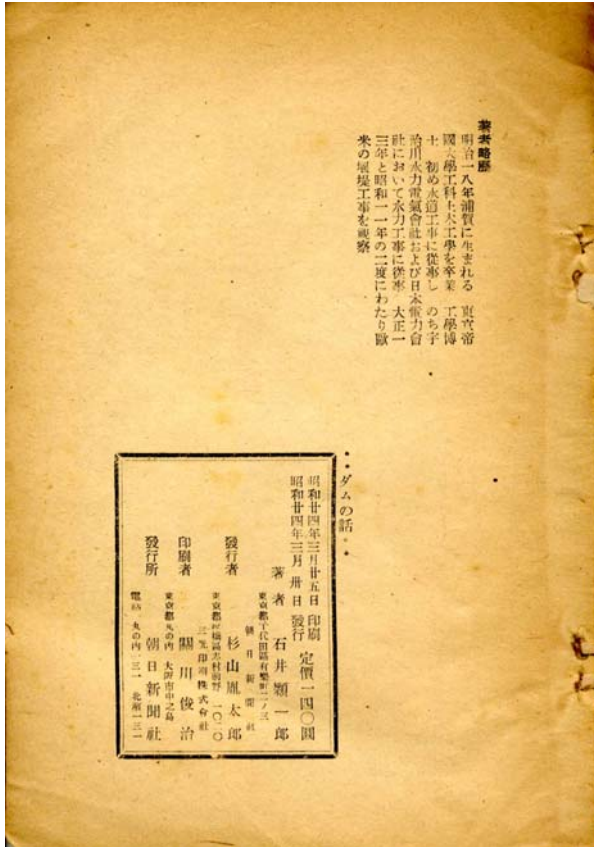
「米國でシルラーと言う技師が射水式ダムを考案した。ダム附近の高地にある土砂に射水を吹きつけて山地を崩かし、種でその土汗を運搬してダムを作るのであるが常に條件が良いと言ふ譯にいかないから「カラベラスダム」の如きは礫が不足のため工事中決潰を起した。烏山頭（八田ダムの造られた地名）は周囲の山が全部粘土だからこの土だけでダムを造るのは危険であると思つた。そこで會文溪から適當な砂礫を汽車で運搬してきて、ダムの兩側に捨て、それに射水して粒度を大小に分解し、ダムを築造する案を考へ出した。その頃は未だ米國に半射水式ダムの現われない時代であつたから、奇抜

な方法と思われたのも無理はない。自分はこの工法がベストと信じたから、それを實行しようとした。ところが當時の〇〇技監や〇〇課長はどうしても許してくれない。そのような射水ダムはないと言ふのである。ないから自分が發明したのだと言つても、外國にもないものは相成らぬと言つて大反對だつた。しかし自分はその工法以外に安全な案はないと信じていたから、それなら自分の意見を學會に發表して賛否を問うことにしてはどうかと申し出たところが、かかる役所の秘密を發表することは以ての外だと言つて、これさえ許してくれない。といつてみすみ危険だと思ふ工法を遂行することが出来るものではない。かような有様でもめていたが、大正九年米國でホルムスと言う技師が半射水式を發明し、一方純射水式のカラベラスが工事中潰れたので、漸く自分の意見が認められ、半射水式工法によつてあのダムが出来たのであつた。同時に一五萬町歩の耕地が甘藷と水稻と三年輪作に成功したのも、自分の創案が認められた結果である。こんな譯で半射水式は米國に先鞭をつけられたが、自分の創案の方が早かつたことをひそかに誇りとしてゐる。」

かう言うことは八田君ばかりではない。私もこれに似よつた経験を持つてゐる。従來の日本の官廳技師はこの通りであつたのである。今や民主主義の日本になつた、これからの若い技術者は進んで發明し、自由に發表し、合理的事とならば思う存分實行出来ることであらう。八田君は生前からダムの上に記念の壽像が建てられてあつた。まさか臺灣人が恩人の銅像を倒すやうなことはないだらう、八田堰堤は今日本のものでなくても、永く臺灣人の生活に恵みを与えることであらう。八田君も以て瞑すべしである。

一〇 米國の請負者と日本の技師

グラントクレーラーダム工事のごとき合衆國政府の工事を見たい者は、事務所に行つて許可證を貰うことが必要だ。それがないと入場することが許されない。許可證の下には政府の現場主任技師と請負者の現場主任と兩方の名前が並べて書いてあるから、そのどれか一方にサインして貰うことが必要である。許可證は有効一日限りだから、暫く滞在して仕事を覚えようとするには、毎日許可證を貰わなければならないが、一日置きでないと發行してくれない。だから政府と請負者と隔日に發行してもらえば、毎日續けて仕事が見られる譯である。こうして見ると政府と請負との兩者は、工場視察許可に關して同等の權力を持つてゐるのである。日本人には不思議に思われるではないか。しかし良く考へて見れば極めて當り前のことで、兩者がそれぞれ責任を分擔して仕事をしているのだから、兩者同等の權力を持つのは當然のことなのである。



日本沖繩県名桜大學  
上江洲 基 贈書



書名：ダムの話  
作者：石川穎一郎  
出版社：東京：朝日新聞社  
出版時間：1949年  
頁数：199頁



## 嘉南大圳之父 八田與一手記一則-

### 烏山頭水庫建壩軼事 中川耕二<sup>1</sup>

譯者：呂榮進<sup>2</sup>

本文來自石川穎一郎著作〈話說壩工〉（一九四九年三月三十日朝日新聞社出版），因在目錄中記載「八田壩」軼事，余認為珍貴史料，特摘錄提供參考。

中川耕二 記 2012.10

八田壩 石川穎一郎<sup>3</sup>

最近找到八田與一君手稿，特公開八田壩工程規劃經緯。

八田君是余親友，大學畢業後一生就職於台灣總督府土木課。他頗富天才，表現創意且奇特，早被列入台灣名人之中。國際著名的嘉南大圳及烏山頭水庫是由他建設完成，因此該水庫大壩尊稱：「八田壩」。

八田君前也曾勘察大甲溪流域，認定可興建「達見壩（德基水庫）」，後余被邀請參與達見壩規劃設計，但惜後來因第二次世界大戰來不及施工，這就是八田君與余交誼的開始。

八田君於昭和十七年（1942）初夏，由台灣來東京致函略以：「將赴南洋視察，盼望回國後暢談愉快...」，但後來他赴南洋途中在玄界灘與多數非常知名的技術者遭難，甚為惋

1 思慕八田與一伉儷暨日台友好之會執行幹事，〈嘉南大圳事業研究序論-烏山頭水庫〉著作者、環境地質顧問。

2 呂榮進（榮晉）1927年7月7日生。係前台灣省水利局工程處長退休，曾主持負責卑南上圳，鯉魚潭水庫及其他等重大水利工程建設事業，在威嚴時代，蔣經國總統二度蒞臨視察嘉勉。中川耕二先生是其日本友人之一，感謝熱心提供本珍貴史料，擬請台灣土木水利技術界，尤其是嘉南農田水利會參考。

3 石川穎一郎略歷：一八八五年在浦賀出生。東京帝國大學工科土木工學畢業，工學博士。初負責自來水工程建設事業，後在宇治川水力發電會社及日本電力會社主持負責水力工程建設：曾於一九二四年及一九三六年奉派前往歐美國家考察堰壩工程。





惜，讓余哀悼萬分。

迄今當時建設八田壩的關鍵人物都已昇天，故余在此公開八田君遺留手記一則來紀念，應該不會失禮吧。

八田壩位於台灣、台南州，採用半水力（射水）填築式土石壩，高度五十六公尺、長度一、三〇二公尺，水庫蓄水量一、五二九億立方公尺，蓄水面積約九·九平方公里，於大正五年（一九一六年）至昭和五年（一九三〇年）建設完成之國家重大水利工程計劃，由於該水庫之竣工送水給嘉南大圳，成功地灌溉十五萬公頃之農地，帶來台灣最大福祉。

以下摘錄八田君遺稿一則

『美國希魯拉技師研發「射水式施工法」，是從壩址附近高地邊坡以水力噴射方式崩鬆土砂，變成泥汁後流經水槽放淤築壩之施工法，在技術上並不適宜，例如卡拉佩斯壩就是因為礫石含量不足，才在施工中潰壩。至於烏山頭（八田壩地名）因周圍山壁地質均屬粘土層，如果採取該粘土築壩一定會帶來危險，所以余研發遠從曾文溪畔大內庄採取合格土石料（如粘土、粉砂、細砂、礫石、卵石、塊石等），以火車運來之後，向壩軸混凝土心牆兩側外面適宜地點傾倒，特採用水力噴射的方式分解，依大小粒設計層序別自然流動放淤兼排滲水，再加以壓實之所謂半水力填築式建壩工法，雖是新穎創案，但在大壩安全及壽命上應屬可行。惟當時如美國等先進國家，還沒有這種半水力填築式工法新思維，所以難怪被認定這只是奇特的構想，是否上乘工法不敢相信。由於本人堅持這是最佳工法擬想要執行，卻被當時〇〇技監及〇〇課長不支持，其理由是現在國際上沒有這種工法。余即時回答：「因為知道沒有這種工法，才由本人來發明」，仍被質疑在外國沒有這種工法，安全上有疑慮，豈可採用而大加反對，然余深信自己創案是絕對最好的工法，所以敬答：「既然這樣，可否提請由學會



來討論議決贊成與否？」，反被警告：「政府秘密不可外洩」而不准。但余也不應盲從其他不安全之施工法來建壩，該如何溝通獲得層峰核可？正猶豫思索中，幸適於大正 9 年（一九二〇年）美國和魯牧斯技師發明與余相似之半水力填築式新工法，且同時期上述之射水式卡拉佩斯壩在施工中潰壩，才余自創的半水力填築式建壩工法獲准採納，而得以順利完成烏山頭水庫工程建設事業，同時余所規劃之嘉南大圳十五萬公頃耕地，依水稻、甘蔗、雜作三年輪灌制度也實施成功，獲得各界肯定。因此也可以說：半水力填築式建壩工法，雖然被美國先驅，但余之創案更早，這一點自感榮譽』。

像上述事情發生並非八田君個人而已，余也曾遭遇類似經驗，是因為日本官廳技師向來較為保守所使然。現在日本已走向民主主義時代，今後年青技術者應自動發明、自由發表，如果是合理的話，可以充分發揮執行。

八田君生前在烏山頭珊瑚潭畔安置紀念銅像，余想：今後不可能將恩人的銅像移走。

戰後八田壩雖非日本所有，但必會永久加惠於台灣人生活。

祈

八田君冥福

#### 「註釋」

【註 1】本文出處：石川穎一郎，昭和 24 年（1949）3 月，ダムの話，P180-183。

出版地：東京都，發行所：朝日新聞社。

【註 2】譯文出處：嘉南大圳之父 八田與一手記一則-烏山頭水庫建壩軼事，農田水利雜誌，102.4，第 59 卷第 12 期，P8-10。



## 八田與一・磯田謙雄・宮地末彦の略歴

	八田與一	磯田謙雄	宮地末彦
生年月日	1886年2月21日	1892年5月6日	1906年2月2日
金沢第一中学校卒	1904年3月(11期)	1911年3月(18期)	1925年3月(32期)
第四高等学校卒	1907年7月(二部工科)	1914年7月(二部工科)	1928年3月(理科甲類)
東京帝国大学卒	1910年7月(工科大学)	1918年7月(工科大学)	1931年3月(農学部)
台湾総督府赴任	1910年8月	1918年8月	1931年4月
引揚		1947年	1946年12月
死亡年月日	1942年5月8日	1974年8月16日	1991年1月20日

### 台湾時代の主要業績

八田與一：桃園大圳事業、嘉南大圳事業。

磯田謙雄：大嵙崁流域埤圳用水量調査、白冷圳事業、頭前溪治水工事、卑南大圳改修工事。

宮地末彦：嘉南大圳事業農田輪作灌溉制度建立、曾文水庫規劃、フィリピンでの水稻栽培指導。

### 引揚後の経歴

磯田謙雄：金沢農地事務局~1948年、長建設(株)~1955年、真柄建設(株)~1968年。

宮地末彦：農林省・北海道開発局~1960年、小松建設工業(株)~1981年。



中川 耕二作



## 八田與一・磯田謙雄・宮地末彥略歷

	八田與一	磯田謙雄	宮地末彥
生年月日	1886年2月21日	1892年5月6日	1906年2月2日
金澤第一中學校畢	1904年3月(11期)	1911年3月(18期)	1925年3月(32期)
第四高等學校畢	1907年7月(二部工科)	1914年7月(二部工科)	1928年3月(理科甲類)
東京帝國大學畢	1910年7月(工科大学)	1918年7月(工科大学)	1931年3月(農學部)
台灣總督府赴任	1910年8月	1918年8月	1931年4月
回國		1947年	1946年12月
死亡年月日	1942年5月8日	1974年8月16日	1991年1月20日

### 台灣時代主要業績

八田與一：桃園大圳事業、嘉南大圳事業。

磯田謙雄：大嵙崁溪流流域埤圳用水量調查、白冷圳事業、頭前溪治水工事、卑南大圳改修工事。

宮地末彥：嘉南大圳事業農田輪作灌溉制度建立、曾文水庫規劃、菲律賓賓水稲栽培指導。

### 回國後的經歷

磯田謙雄：金澤農地事務局~1948年、長建設(株)~1955年、真柄建設(株)~1968年。

宮地末彥：農林省・北海道開發局~1960年、小松建設工業(株)~1981年。